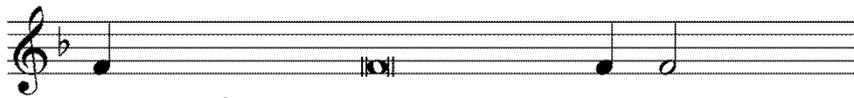


【 復活讃詞 第1調 】

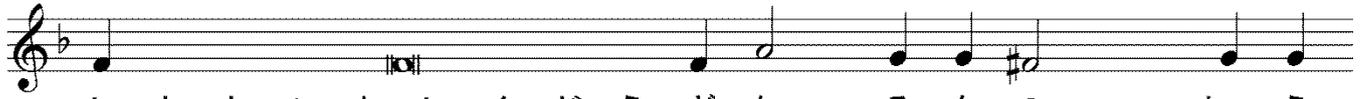
きゆ うせ え いしゆよ、 イウ デ ヤ の ひ と は か を  
 救 世 主 人 墓  
 ふ うじ て 、 へ い そ つ なんぢ の い さ ぎ よ き み を  
 封 兵 卒 爾 潔 軀  
 ま も る と き 、 なんぢ は み っ か め に ふ く か つ  
 守 時 爾 三 日 目 復 活  
 し て 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。  
 世 界 生 命 賜  
 ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢ い の ち を ほ ど こ す の  
 故 天 軍 爾 生 命 施  
 し ゆ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は  
 主 呼 光 榮  
 なんぢ の ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ  
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾  
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む  
 國 歸 獨 人 慈  
 し ゆ よ 、 こ う え い は なんぢ の お も ん ぱ か り に  
 主 光 榮 爾 慮  
 き す 。  
 歸

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

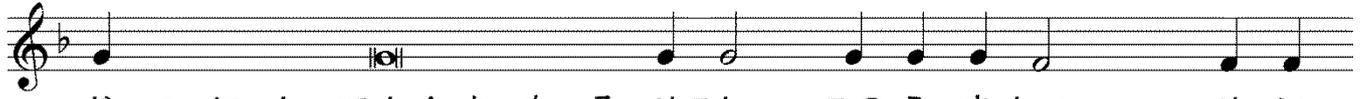
こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今



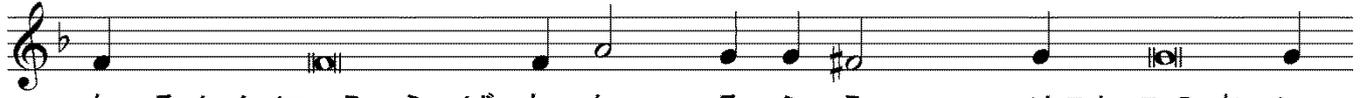
いつもよよに、アミン。  
何時 世世



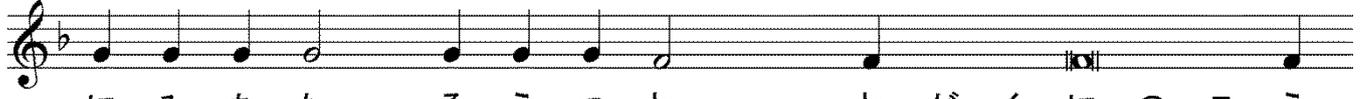
しととひとしくどうざなるものちゅう  
使徒等 同座者 忠



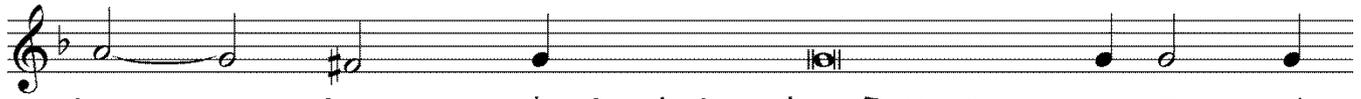
じつにしてしちなるハリストスのえきしゃ、せい  
實 神智 役者 聖



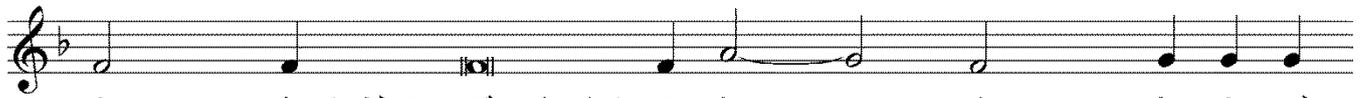
なるしにえられたるふえ、ハリストスのあい  
神 撰 笛 愛



にみちたるうつわ、わがくにのこう  
満 器 我 國 光



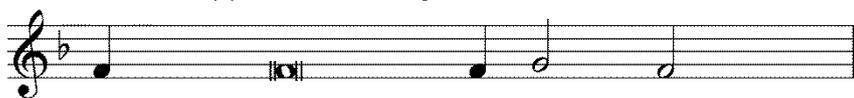
しよおしゃ、あしとしゆきょうせいニコライ  
照 者 亜使徒主教 聖



よ、なんぢのぼくぐんのため あめ、および  
爾 羊 群 爲 及



ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全世界 爲 生命 賜 聖



さんしゃにいのりたまえ。  
三者 祈 給

司祭) ( 黙誦: <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

<sup>さんえい</sup> ヘルヴィムより讚榮せられ、<sup>ことごと</sup> 悉くの<sup>てんぐん</sup> 天軍より<sup>ふくはい</sup> 伏拝せられ、<sup>ばんぶつ む ゆう</sup> 萬物を無より有と

<sup>ひと なんぢ ぞう しょう</sup> なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、<sup>よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かが</sup> 爾が諸の賜を以て之を飾り、

<sup>ねがもの ちえ めいご あた つみ おこなもの す</sup> 願う者に智慧と明悟とを與え、<sup>そのすくい ため つうかい</sup> 罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔

<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ ととき おい なんぢ せい</sup> を立て、我等卑しくて不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ  
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖なる神、聖なる勇毅、聖  
じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
常生者我等を憐  
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖なる神、聖なる勇毅、聖  
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
常生者我等を憐  
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖なる神、聖なる勇毅、  
せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
聖常生者我等を憐  
れめよ。こうえいはちちとこせいしん  
光榮父子聖神

に き す、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を  
 殺 聖 常 生 の 者 我 等

あ わ れ め よ 。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第1調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅ よ、 わ れ ら なんぢを た の む が ご と く、  
 主 我 等 爾 頼 如

な んぢの あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま  
 爾 憐 我 等 垂 給

え 。

誦經) <sup>ぎじん</sup>義人よ、<sup>しゅ</sup>主の爲に<sup>ため</sup>喜<sup>よろこ</sup>べ、<sup>さんえい</sup>讚<sup>ぎしや</sup>榮<sup>かな</sup>するは義者に<sup>あ</sup>適う、



しゅ よ 、 わ れ ら なんぢ を た の む が ご と く 、  
主 我 等 爾 頼 如  
な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま  
爾 憐 我 等 垂 給  
え 。

誦經) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>われらなんぢ</sup>我等爾<sup>たの</sup>を頼むが<sup>ごと</sup>如く、



な んぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま  
爾 憐 我 等 垂 給  
え 。

【 使徒經 (アポストロス) 188 端 コリント後書 9 章 6 節～11 節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup>聖使徒パウエルが<sup>じん</sup>コリント人に<sup>たつ</sup>達する<sup>しょ</sup>書の<sup>よみ</sup>讀、

司祭) <sup>つつし</sup>謹<sup>き</sup>みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup>兄弟よ、<sup>とぼ</sup>乏しく稼く者は<sup>ま</sup>乏しく<sup>とぼ</sup>穡り、<sup>か</sup>豊に稼く者は<sup>ゆたか</sup>豊に<sup>ま</sup>穡らん。人<sup>か</sup>各<sup>ゆたか</sup>其<sup>か</sup>心<sup>ひと</sup>の<sup>おの</sup>おの<sup>その</sup>その<sup>ところ</sup>ところ

<sup>ほつ</sup>欲する<sup>ところ</sup>所に<sup>したが</sup>随い、<sup>うれい</sup>憂に<sup>よ</sup>由るに<sup>あら</sup>非ず、<sup>し</sup>強いて<sup>な</sup>爲すに<sup>あら</sup>非ずして<sup>ほどこ</sup>施すべし、<sup>けだ</sup>蓋<sup>しかみ</sup>神は<sup>たの</sup>樂

<sup>あた</sup>みて<sup>もの</sup>與うる者を<sup>あい</sup>愛す。且<sup>かつ</sup>神は<sup>なんぢら</sup>爾等を<sup>しょ</sup>諸恩に<sup>と</sup>富ましめんことを<sup>よく</sup>能す、<sup>なんぢら</sup>爾等常に<sup>およ</sup>凡の

<sup>こと</sup>事に<sup>おい</sup>於て<sup>た</sup>足らざるなくして、<sup>およ</sup>凡の<sup>ぜん</sup>善事を<sup>な</sup>爲すに<sup>ゆたか</sup>饒ならん<sup>ため</sup>爲なり、<sup>しる</sup>録されしが<sup>ごと</sup>如し、<sup>いわ</sup>云く、

<sup>かれ</sup>彼は<sup>さん</sup>散じて、<sup>ひん</sup>貧者に<sup>ほどこ</sup>施せり、<sup>その</sup>其義は<sup>よ</sup>世に<sup>そん</sup>存すと。播く者に<sup>ま</sup>種を<sup>もの</sup>與え、<sup>たね</sup>食の爲に<sup>あた</sup>餅

<sup>そな</sup>を<sup>もの</sup>備うる者は、<sup>ねが</sup>願わくは<sup>なんぢら</sup>爾等が<sup>ま</sup>播く<sup>そな</sup>種を<sup>かつ</sup>備え且<sup>また</sup>殖し、<sup>また</sup>又<sup>なんぢら</sup>爾等の<sup>ぎ</sup>義の<sup>み</sup>實を<sup>ま</sup>益さんことを、

<sup>なんぢら</sup>爾等が<sup>およ</sup>凡の<sup>こと</sup>事に<sup>と</sup>富むに<sup>よ</sup>由りて、<sup>ひろ</sup>博く<sup>ほどこ</sup>施す<sup>え</sup>を得ん<sup>ため</sup>爲なり、<sup>こ</sup>此れ<sup>われら</sup>我等に<sup>よ</sup>由りて<sup>かみ</sup>神に<sup>たて</sup>奉る

かんしゃ な  
感謝を作す。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取る  
ことになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきで  
ある。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あな  
たがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼  
は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりである。種まく  
人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そして  
あなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、  
惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう</sup> 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。。

誦經) <sup>おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ</sup> 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世に

<sup>た もの われなんぢ な うた</sup> 垂るる者よ、我爾の名に歌わん、



司祭) ( 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし、て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書17端 5章1~11節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス、ゲンニサレトの湖の濱に立ちて、二の舟の湖に在るを見たり、漁者は舟を離れて網を洗えり。彼はシモンに屬する一の舟に登りて、少しく岸より離れんことを請い、坐して舟より民を教えたり。語り竟りて、シモンに謂えり、深き處に移り、網を下して、漁せよ。シモン對えて曰えり、夫子よ、我終夜

ろう う ところ しか なんぢ ことば よ われあみ おろ すで これ おこな  
 勞して、得る 所 なかりき、然れども 爾 の 言 に依りて、我 網 を下さん。既に之を 行  
 いて、魚 を圍めること 甚 多く、網裂くるに至れり。乃 他 の 舟 に在る 侶 を招きて、來  
 り 助けしむるに、彼等 來りて、魚 二 の 舟 に物ちて、幾 ど 沈まんとせり。シモン ペトル之  
 を見て、イエスの 膝 下に伏して曰えり、主よ、我 を離れよ、我 罪 人 なればなり。蓋 彼  
 およ かれ とも あ もの みなすなど うお ため はなはだおどろ とも  
 及び彼と 偕 に在りし者は、皆 漁 りたる 魚 の爲に 甚 驚 けり、シモンの 侶 たりしぜ  
 エデイの子イアコフ 及びイオアンも 亦 然り。イエス シモンに謂えり、懼るる 勿れ、今より  
 のちなんぢひと すなど かれらふね きし ひ いつさい す かれ したが  
 後 爾 人を 漁 らん。彼等 舟 を岸に曳き、一切 を捨てて、彼に 従 えり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そうの小舟が寄せてあるのを  
 ごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そうはシモンの舟であったが、イ  
 エスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお  
 教えになった。話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。  
 シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、  
 お言葉ですから、網をおろしてみましよう」。そしてそのとおりにしたところ、おびたしい魚の群れ  
 がはいて、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をし  
 たので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。これを見て  
 シモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わた  
 しは罪深い者です」。彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびたしいのに驚いたからである。  
 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言わ  
 れた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。そこで彼らは舟を陸に引き  
 上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ